



## 4月の暴説がいやではない理由



金東葉  
慶南大極東問題研究所教授  
donykim@kyungnam.ac.kr

既に桜の花びらも散った4月、朝鮮半島には季節外れの雪が降っている。雪の種類も多様だ。韓国と米国の合同軍事演習期間だった2～3月に付きまとっていた危機「説」とは異なる（訳者注：韓国語では「雪」と「説」の発音が同一）。先制攻撃「説」を超え、出所不明のうわさに日付までついた北朝鮮爆撃＝北爆「説」に至るまで、本物の「雪」ではなく、米国の軍事行動という言葉の爆弾が朝鮮半島に落ちている。証券業界が動揺するほどに、本物の雪よりも朝鮮半島を凍らせている。

しかし、何の理由もなく北爆説が生まれたわけではない。根本的な原因こそ挑発行動を続ける北朝鮮が提供したのだが、米国が軍事行動を見せる可能性は確かに実際よりも拡大再生産された。誰かが残り日数の少ない韓国大統領選挙を安全保障の枠組みに引き込もうと意図したのかもしれない、などという疑惑を提起しようとしているわけではない。現在、米国と北朝鮮の双方が軍事的な対応を取る中で、はたして両者が韓国の政治状況を考慮すべき要素として認めているかどうかを考えてみれば、大統領選関連説は陰謀論に近い。残念ながら、これこそが「コリア・パッシング (korea Passing)」である。

北朝鮮が絶え間なく核とミサイルの開発を続ける状況の中、先制攻撃などの軍事的対応を検討することは当然のことである。もし、実際に北朝鮮に明白な攻撃の兆候があれば、当然、先制攻撃を行わなければならない。そうではなく予防的なレベルでの軍事行動は様々な側面で非現実的である。米国の立場で言えば、韓国内に滞在している米国人約30万人の避難だけの問題ではない。北朝鮮の全ての核施設とミサイルを破壊することも不可能であり、韓国首都圏に向けられているとんでもない数の長距離砲の脅威もある。無責任な軍事行動による危険は、韓国国内の動揺はもちろんで、朝鮮半島と地域の安定を阻害し、韓米同盟までも危うくする懸念がある。

トランプ政権は初期から様々なルートで、オバマ前政権とは異なり北朝鮮の核問題解決のため、軍事的な選択肢までテーブルの上に載せて検討すると言明してきた。これまでテーブルにさえ載せず引き出しにしまっておいたものを、今になってやっと取り出して載せた、まだ単なる数多くの選択肢の一つにすぎない。あえて優先順位をつけてもそれほど高くもない。韓国がしゃしゃり出て、対北朝鮮軍事行動が優先順位の高いシナリオであるかのように増幅するのは、むしろ間違ったシグナルを北朝鮮に送り、米国までも当惑させる可能性がある。

4月初旬の米中首脳会談の直前、トランプ大統領は北朝鮮の核問題について、中国が動かないのなら米国が単独で動くと言った。北朝鮮の核問題を手段として中国に圧力をかけたものであるにもかかわらず、まるで米国が軍事的行動に踏み切るかもしれないという意味に拡大解釈された。米国がシリアを初めて攻撃した直後、原子力空母カールビンソンが朝鮮半島近海に再び展開されるという話は、あたかも北爆説の明確な兆候であるかのように受け止められた。これには、トランプ大統領がSNSに北朝鮮に対する警告メッセージを書き込んでいることも一役買っている。それさえも、北朝鮮というよりむしろ中国に向けて北朝鮮問題を解決させるための圧力だと分析する見方が多い。トランプ政権はまだ北朝鮮を直接相手にするほど暇ではなく、担当者の人事を含め準備も終わっていない状態である。

トランプ政権はオバマ政権の「戦略的忍耐」を失敗だとし、「全ての選択肢」を検討すると述べているが、全てというのは何かではないということだ。その上、これまで原則的にトランプ政権が表明した北朝鮮の核問題戦略の方向は「最高の圧力と介入」といった程度だが、当面の圧力は中国に押し付けているのが実情だ。中国もこうした米国の要求やニーズをうまく利用し、対北朝鮮圧力に歩調を合わせているようなジェスチャーを巧妙に見せている。北朝鮮の核問題を巡り、米中のカルテルが結ばれることはあるとしても、ピクディールはないと思われる。

トランプ政権は当分の間、選挙で勝利をもたらした国内問題や経済問題を優先とし、北朝鮮問題は事後に交渉であれ対話であれ準備が整ってから介入するとみられる。恐らく、その時期は北朝鮮関連の人選が終わり、北朝鮮政策が具体化する6月か7月以降になるとと思われる。米国はそれまで北朝鮮が黙って待つことを望み、軍事的威嚇で圧力をかけている。しかし、北朝鮮は屈することなく、米国にいま対話に出て来いと強要している。北朝鮮は核問題のアジェンダの優先順位を高め

ようとしており、米国は応じておらず、緊張が高まっているのである。

重要なゲームを控えた監督が、相手が選手の選抜もできず準備が整っていなかったといって、自分の選手にも練習させずに遊ばせるような真似はしないはずだ。北朝鮮は15日、閲兵式で多様な弾道ミサイルを公開した。新しい形態のICBMも見せた。その翌日には新浦から弾道ミサイル1発を発射した。今年だけで5回目の発射となる。米国の軍事的圧力に屈しないという意思表示であり、今後の米国との本ゲームを控え、打たれ強さを鍛え、交渉カードを増やししながら、トランプ氏の不確実性を考慮して挑発のレベルを調整しているとみられる。6月か7月に米朝間でいかなる形にせよ本ゲームが始まるとしたら、その前に北朝鮮がICBMの発射実験に成功すると、成功せず出てくるのでは、米朝のどちらにとっても違いが大きい。米朝は交渉に向けて初めの予想単価を吊り上げ、主導権を握ろうとする激しい神経戦を行っているのだ。これが季節外れの4月、朝鮮半島に大雪＝暴説が降ってくる理由だ。

冬に大雪が降った年は豊年になるそうだ。季節外れの4月に降る北爆説には、懸念とともにひそかな期待感を持っている。今の緊張感が今後の米国と北朝鮮の本ゲームに向けた主導権争いであり交渉カード作りなら、むしろどちらか片方が一方的に優勢な状態よりも、ゲームが始まる可能性が大きくなる。そうやって始まったゲームの結果は見通せないが、ゲームの開始もできないよりは希望が大きくなる。

今、韓国が本当に懸念し、考えなければならないのは、米国と北朝鮮、そして中国がもたらす秋の収穫をただ待つことしかできない韓国の哀れな姿である。今から準備しないと、秋の収穫で何も得られない 코리아・パッシングになるかもしれない。

MORE ARTICLES

—上記の内容は著者の意見であり、極東問題研究所の公式な立場を示すものではありません。  
—メーリングリストに登録をご希望の方はお名前や電子メールアドレス、所属先を下記のメールアドレスまでお送りください。 [ifes@kyungnam.ac.kr](mailto:ifes@kyungnam.ac.kr)

You can remove your email address from our mailing list by clicking link below

[\[No longer receive e-mail\]](#)



경남대학교 극동문제연구소  
The Institute for Far Eastern Studies

COPYRIGHT(C) 2010 IFES ALL RIGHTS RESERVED  
2(Samcheong-dong) Bukchon-ro 15-gil, Jongno-gu, Seoul 110-230,  
Republic of Korea  
TEL. +82-2-3700-0739 FAX. +82-2-3700-0707  
EMAIL. [ifes@kyungnam.ac.kr](mailto:ifes@kyungnam.ac.kr)